

1. 研究の目的

Beagleによれば、1980年代半ば以降に登場したとされるインフォメーション・コモンズは、のちに「ラーニング・コモンズ」を筆頭に様々な名称のバリエーションを広げつつ、1995年頃までに米国の図書館で先駆的な取り組みとして広まった¹⁾。2000年代に入った頃から、日本の大学図書館にもインフォメーション・コモンズやラーニング・コモンズ概念が輸入され、2012年現在ではその設置も進んできている。日本の大学図書館では、ラーニング・コモンズに代表されるような必ずしも図書館の資料の利用を第一義としない図書館利用を受容する考え方は、比較的新しいものと考えられる。そこで本研究では、ディスカッションを中心とするアクティブラーニングの支援や、PC利用場所の提供などの包括的な学習支援を中心とした学生へのサポートを図書館が担うという考え方が、いつ頃からどのような経緯を経て、日本の大学図書館において受容されるようになったのかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

2-1 調査対象

調査対象は、戦後新築・改修工事を行った日本の大学図書館（短期大学図書館を含む）で、施設の概要等がわかる資料（建築図面など）の入手が可能な図書館とした。

2-2 調査方法

調査方法は文献調査とした。図書館関係雑誌3誌、建築関係雑誌14誌、図書9タイ

トルを対象に、大学図書館の設置時の図面や紹介記事を収集し、のちのラーニング・コモンズ機能につながる設備やサービスの確認を実施した。ここではラーニング・コモンズ概念を、Daniels&Barratt²⁾、MacWhinnie³⁾、Roberts⁴⁾、米澤⁵⁾、呑海・溝上⁶⁾らの定義を参考に、以下の通りとした：「場所としての図書館の再考と、共同学習を中心とする学習パラダイムの転換を背景に、従来の図書館の学習支援機能を、情報通信技術革新がもたらした新たな可能性と融合させたサービス」。具体的には、McMullen⁷⁾、Lippincott⁸⁾らの定義を中心に、以下の設備やサービスを有するものとした。

- 1) コンピュータ（個人用，グループ用）
- 2) スキャナ，プリンタ，デジタル化機器
- 3) 共同学習スペース
- 4) プレゼンテーション練習室
- 5) 電子教室
- 6) ライティングセンター
- 7) 文化イベントスペース
- 8) カフェ，ラウンジ
- 9) プロジェクト
- 10) マルチメディア制作エリア
- 11) 支援（適応）技術のあるエリア
- 12) ビデオ会議室
- 13) 情報リテラシー指導室
- 14) 相談エリア
- 15) ノート PC やデジタルカメラの貸し出しなど IT 支援員のいるカウンター
- 16) 事務室
- 17) 形式ばらない，快適なシート

最終的に 1950 年代から 2011 年まで、193 館を調査した。

第 1 表 対象館の内訳

設置者種別	館数
国立	59
公立	10
私立	124
合計	193

さらに PC 設備の設置状況を確認するため、『大学図書館実態調査結果報告』および『学術情報基盤実態調査結果報告』における図書館の電子化に関する項目の経年調査を行った。

3. 調査結果

3-1 図書館のコンセプト

1957 年竣工の関東学院大学図書館のコンセプトに、「学生が喫茶店に来るように快適な気分で読書できる環境を作りたい」とあるように、この頃から、学生に利用しやすい図書館、学習用図書館としての機能を意識して図書館が設計される例が散見された。その延長線上の発想として全面開架・自由接架式の図書館が主流となっていった。ラーニングcommonsにおける、学習支援を図書館の使命と位置付ける考え方の源流が見られる。

3-2 視聴覚設備

視聴覚室は①個人用視聴覚資料利用室、②多人数用視聴覚ホールの 2 種類がみられる。前者は 1950 年代から設置例があり、媒体は当初のレコードから現在の DVD や BD まで変化している。1980 年代にニューメディア、マルチメディア資料が飛躍的に増加したことを受け、これらのメディアに対応できる体制を整えることが当時のトレンドの一つであったことが伺える。同じく 1980 年代からは、個人用だけでなく、少人数の

グループで利用できるブースの設置も増加していた。

第 2 表

視聴覚設備（個人用）の年代別設置状況

年代	設置館数	調査館数	比率
1950 年代	1	6	16.7%
1960 年代	8	41	19.5%
1970 年代	12	34	35.3%
1980 年代	35	53	66.0%
1990 年代	19	23	82.6%
2000 年代	21	36	58.3%
合計	96	193	49.7%

後者の視聴覚ホールは、それよりもさらに多く、数十人から多い場合には百人以上の希望で視聴覚資料が利用できる設備である。1960 年代から設置例が見られ、一定して多く設置されている設備の一つとなっている。会議室や講演ホールとの兼用として「多目的ホール」や「図書館ホール」などの名称で設置される例もあり、図書館でのイベント開催、授業、図書館講習会などの利用に供されていた。

第 3 表

視聴覚設備（多人数用）の年代別設置状況

年代	設置館数	調査館数	比率
1950 年代	0	6	-
1960 年代	17	41	41.5%
1970 年代	8	34	23.5%
1980 年代	27	53	50.9%
1990 年代	12	23	52.2%
2000 年代	10	36	27.8%
合計	74	193	38.3%

3-3 共同学習スペース

多人数での共同学習を目的とした、仕切のある小部屋が用意されているものを「共同学習スペース」ととらえ、設置例を見た。

もっとも古い例では 1955 年竣工の津田塾大学における「ゼミナール室」の例があるが、新館設計にあたり頻繁に設置されるようになったのは 1970 年代頃からだたと見られる。津田塾大学図書館および 1968 年竣工の東京経済大学図書館では、共同学習スペースは館内に 1 室のみであったが、その後 1970 年代に設置された館では広さの違う部屋が 2 室以上用意される例が増えることから、1970 年代をグループ学習室が広がりを見せた時期と考えることができる。

第 4 表 G 学習室の年代別設置状況

年代	設置館数	調査館数	比率
1950 年代	1	6	16.7%
1960 年代	10	41	24.4%
1970 年代	14	34	41.2%
1980 年代	33	53	62.3%
1990 年代	16	23	69.6%
2000 年代	20	36	55.6%
合計	94	193	48.7%

3-4 カフェ・ラウンジ

1960 年代から、「休憩室」、「休憩コーナー」などの名称で、ラウンジに該当すると考えられる設備の設置例が見られる。図書館内に、閲覧室・読書室・学習室などと別に、リフレッシュ目的の設備を設置することの重要性には、早くから注目が集まっていたと考えられる。1980 年代後半から 1990 年代に入ると、ラウンジに自動販売機を置くなど飲食機能を持たせたり、談話コーナーとして適度な話し声を許容したりする例も見られるようになる。2000 年代に入るとこの傾向は一層加速し、ラウンジに PC、マルチメディア機能、飲食コーナーやカフェなどを敷設した、より長時間滞在に

目を向けた多機能なラウンジの設置が増加している。

3-5 授業用教室

授業用教室は、独立した図書館棟の中には古くはあまり見られない。ただし 3-2 で挙げた「視聴覚ホール」や 3-3 で挙げた「共同学習スペース」の中には、ゼミナール形式の授業や図書館講習会、さらには図書館を利用した授業などの利用を想定して作られたものも見られた。正規の授業との連携や、図書館の学習支援へのコミットは、ラーニング・コモンズ以前の図書館設備からも意識されていたことがわかる。

3-6 PC 設備

『大学図書館実態調査結果報告』で PC 設備の導入調査を始めたのは 1986 年である。当初は「図書館の電算化」という項目名で、業務電算化についての調査の意味合いが強かった。1996 年からは「電子図書館機能」の項目名に変わり、サービスとしての普及面が前面に押し出されるようになった。この中では利用者用端末の図書館内設置台数が調査されており、調査開始当初は 1 館平均 5 台前後で推移していたが、1990 年代に入ったあたりから増加しはじめ、1996 年には初めて二桁に乗り 11.6 台に、2000 年には 21.4 台になっている。

文献調査の結果を見ると、やはり 1980 年代の終わり頃から「検索用端末」などの名称で、蔵書目録や CD-ROM などの検索端末の設置例がみられるようになる。1990 年代後半になるとオンライン蔵書目録や有料 DB の検索端末として、代行検索または利用者が自ら利用できる PC が設置されている。2000 年代に入ると検索用端末とは別に、インターネット利用端末やワープロソフト・表計算ソフトなどの製品が利用でき

る PC の設置がみられるようになる。

4 まとめ

ここまで、結果を設備別に見てきたが、最後に年代別に、どのように図書館のラーニング・コモンズ機能につながる設備が受け継がれてきたかを概観してまとめとする。戦後 1950 年代にはすでに、学生に使いやすい学習用図書館機能の強化を目指す方針が日本の大学図書館界全体で目立つようになっていた。1960 年代になると、書庫や開架の閲覧室以外のラーニング・コモンズの要件と考えられる設備の中では、多人数用の視聴覚ホールの設置例が最も多くみられる。個人観賞用の AV ブースは視聴覚ホールにはやや遅れて設置が広まり、現在に至るまで一貫して増加している。これは AV 機器の低価格化や小型化、多様化などが影響していると考えられる。

共同学習スペースに見られる「話し合い学習」への対応は、1970 年代になって広まった。ラーニング・コモンズ概念輸入以前から、大学図書館はこうした学習支援の必要性を意識していたといえる。1980 年代に入るとニューメディア資料が増加したため、これらの媒体に対応する機器の設置がますます加速した。またこの頃から始まった図書館業務電算化の流れは、1990 年代には利用者向けの電子的サービスとして図書館内の PC 設置にもつながっていった。国内でラーニング・コモンズが広く紹介されるのはこの後、2000 年代後半に入ってからになるが、図書館の中に資料のみならず、学習に必要な新しい設備に迅速に対応する機運はすでにあつたと見ることができる。一方、ラーニング・コモンズの主要な側面の一つである人的支援サービスへの対応がこれまでの日本の大学図書館の歴史

の中にどのように受け継がれているかについては、本調査では明らかにすることができなかった。この点では調査方法を含め再度検討する必要がある。

注・参考文献

- 1) Beagle, Donald Robert. The Learning Commons in historical context. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, vol.7, p. 15-24.
- 2) Daniels, Tim; Barrat, Caroline Cason. What is common about learning commons? A look at the reference desk in this changing environment. Steiner, Sarah K.; Madden M. Leslie ed. The Desk and Beyond: Next Generation Reference Services. Chicago, ACRL, 2008. P.1-13.
- 3) MacWhinni, Laurine A. The information commons: The academic library of the future portal. Libraries and Academy. 2003, vol.3, no.2, p.241-257.
- 4) Roberts, Regina Lee. The evolving landscape of the learning commons. Library Review. 2007, vol.56, no.9, p.803-810.
- 5) 米澤 誠. 動向レビュー インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ: 大学図書館におけるネット世代の学習支援. 2006, カレントアウェアネス vol.289, p.9-12
- 6) 呑海沙織, 溝上智恵子. 大学図書館における学習支援空間の変化: 北米の学習図書館からラーニング・コモンズへ. 図書館界. 2011, vol.63, no.1, p.2-15.
- 7) McMullen, S. US Academic libraries: today's learning commons mode. 2008, PEB Exchange, OECD.
- 8) Lippincott, Joan K. Information commons: Surveying the landscape. Forrest, Charles; Halbert, Martin ed. A Field Guide to the Information Commons. 2009, Maryland, Scarecrow Press, p.18-31.